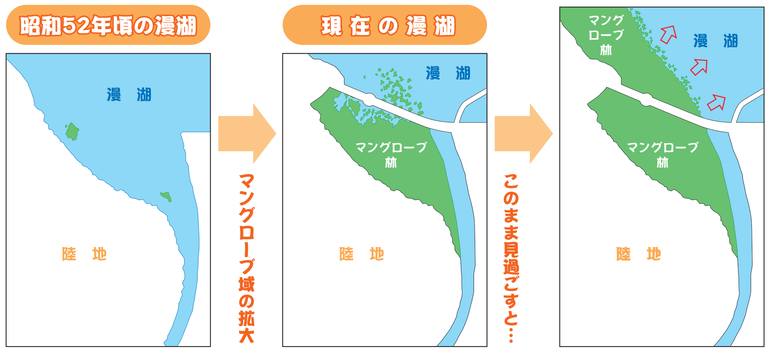
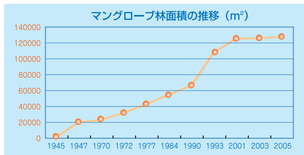
●漫湖のうつりかわり



約30年後にはさらに陸地化が進むと予想されます

漫湖は、これまで埋立や道路橋の建設などによりその姿を大きく変えてきました。

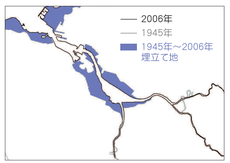
とよみ大橋の建設や饒波川上流での農地整備の際の土砂の流入、浚渫による流路の固定化、マングローブの植林など、様々な要因が重なって、マングローブ林が拡大し、陸地化が進んでいる様子が分かります。



何が漫湖に起こっているの？

マングローブは、橋の南側まで広がり、陸地化が進んでいます。（2010年）

陸地化が進んだことにより、様々な変化が起こっています。



■餌をとり、休憩する場所が減ってきました

マングローブ域が拡大して、水鳥達たちが餌をとり、休憩する場所が少なくなってしまいました。

■地面が乾き、餌がとりにくくなっています

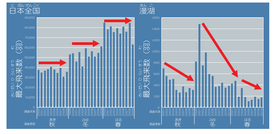
水鳥たちは、主に水分を多く含む泥状の干潟にクチバシを差し込み、餌となるゴカイ類やカニなどの生きものをついばんでいます。マングローブが密生する場所では、水鳥の餌となる生きものの数が少なく、餌にはあまり適していない貝類や大型の甲殻類が多いことがわかりました。また、陸地の面積が増え、乾いた固い地面が多くなってきたため、水鳥が餌をとりにくくなっています。

■マングースが出没しています

漫湖にはもともといなかったマングースが隣接する林からマングローブ林内に侵入しています。マングースは、水鳥の餌となるカニなどの甲殻類のほか、水鳥であるバンのヒナを食べていることも報告されています。以前はよく見かけたバンも、近年ほとんど見ることが出来なくなりました。

鳥の飛来数が減っています

日本全国と漫湖で、同じ種類の鳥の飛来数を調べてみると、日本全国では鳥の飛来数はあまり変わっていないのに、漫湖に飛来する鳥の数が減っていることがわかりました。



●保全事業の取り組み

渡り鳥の飛来数が大幅に減少している国指定漫湖鳥獣保護区において、干潟を適切に管理し、自然環境の改善を図ることによって、シギ・チドリ類などの水鳥を中心とした渡り鳥の飛来数回復を目的とした事業に取り組んでいます。

マングローブを除去

これ以上陸地化が進行しないように、マングローブを一部除去し、流れを確保したり、鳥の休憩場所を確保します。

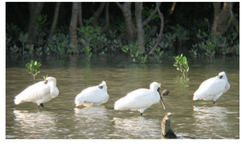
試験伐採

平成20年度に漫湖水鳥・湿地センター前面のマングローブを試験的に伐採しました。試験伐採を行ったところで、鳥の利用状況や餌となる生きものや干潟の泥（底質）の状況やマングローブの回復状況等の調査を行いました。

その結果、水鳥たちが少しずつ戻ってきていることがわかりました。

▲試験伐採地区

試験伐採地区にやってきたクロツラヘラサギ▼



木道の設置

水鳥や干潟の生き物を観察することが出来る木道の観察デッキ（長さ110m）を設置しました。

マングースの捕獲

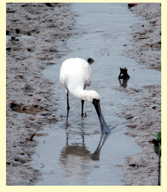
豊見城城趾の林から干潟に入ってくる外来種のマングースは、水鳥の餌を横取りしたり、鳥のヒナを食べる可能性があります。マングースを捕獲して水鳥たちが暮らしやすい環境を守ります。

漫湖のマングローブ内自動撮影装置で撮影

泥干潟の回復を目指します

マングローブ林内の水の流れを確保することで、干潟に土砂などがたまりにくくします。
水分を多く含む泥干潟を回復させて、鳥が餌をとりやすい環境を維持・創出します。

漫湖の泥干潟には、鳥の餌となるゴカイやカニ類など多くの生き物が生息しています。



水鳥の他にも多くの生きものが生息しています。